

<自由投稿>

樽前山 1874 年火口を見たイザベラ・バード

宮坂 省吾¹⁾



Isabella_Bird (ウィキペディア)

2021 年 6 月 13 日受付

2021 年 8 月 12 日受理

¹⁾ 北海道総合地質学研究センター

Hokkaido Research Center of Geology

連絡先: 札幌市東区中沼町 29 番地 283

Nakanuma-cho 29-283, Higashi-ku, Sapporo City, Hokkaido 007-0890, Japan, miyasaka@hrcg.jp

はじめに

北海道開拓使製図主任の船越長善 (1830-1881) が樽前山 1874(明治 7) 年噴火の様子を描いた「樽前岳噴火の図」について、前報で紹介した (宮坂, 2020). 残念ながら、彼は吹雪に阻まれて火口に至ることはできなかった.

その 4 年後、大英帝国の旅行家でナチュラリストのイザベラ・ルーシー・バード (1831-1904) は樽前山火口まで踏破した. その年に B.S. ライマン (1835-1920) は「北海道地質総覧」を出版し、北海道の地質学研究に曙光が灯された.

1880 年にバードの紀行文が「Unbeaten Tracks in Japan」(日本の未踏の地) として出版された. 日本でも多くの翻訳が紹介されたが、金坂清則による「完訳日本奥地紀行」(2012) が最新のものである.

金坂によると、5 年前に訪れたハワイのキラウエヤ火

山などの記述と描写が高く評価された旅行記 (1875)「ハワイ諸島」が『ネイチャー』誌に絶賛され、一流の旅行作家としての地位を確たるものにした. その後の非キリスト教世界の探検などの功績によって 1892 年、女性初の王立地理学協会特別会員に選出されたという.

2012 年に植物学者・辻井達一 (1931-2013) はバードが歩いた道の自然の事物を見直して紹介し、彼女の見た火山地形や並木を含めた植物が現在の道路を彩っていると指摘した (辻井・窪田, 2012).

今回は、「完訳 日本奥地紀行」の訳注を参考にバードの樽前山行を紹介し、筆者の所見を加える.

1. 1874(明治 7) 年樽前山噴火の経緯

船越長善 (1874) の報告を整理すると、噴火の経緯は次のようになる (宮坂, 2020).

噴火は 2 月 8 日午前 11:25 に噴火が始まり午後 2:30 まで続き (第 1 の大噴火)、小噴火 2 回の後、午後 6 時

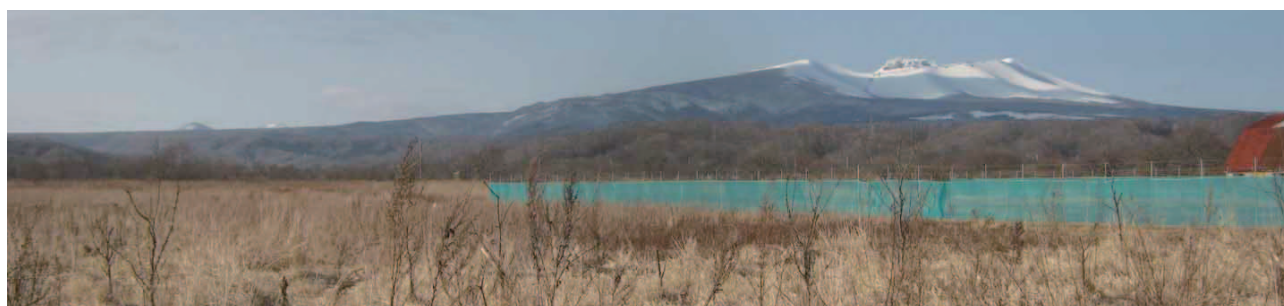


図 1 白老から見た樽前山と凝灰岩丘 (2015 年 2 月 21 日撮影) 右手に樽前山山頂の大型火口と 1909 年溶岩ドームがあり、左手の尾根に多峰古峰 (たっぷこっぷ) 山南の小山が見える。草原は白老川沿いの沖積平野、背後の支笏火砕流台地は写真左の白老台地に連続する。

ふたたび鳴動して10倍もの規模の噴火が起り深夜11時過ぎに鳴動は止んだ(第2の大噴火)。

2月9日午後8時、地震に引き続いて黒煙が上がり数次にわたって火を噴いた(第3の大噴火)。2月10日以降は噴煙と鳴動があるくらいで大きな噴火は無く、噴火鎮定とされた。

このように噴火経緯は開拓使の命によって記載されたが火口の観察はなされず、最初の観察者は4年後のバードであった。彼女がナチュラリストと呼ばれる由縁が、これで理解できる。彼女は「日本奥地紀行」に火口の様子を書き残したが、スケッチは付していない。

2. 噴火は2月16日まで続いたか？

開拓使の噴火記録は2月8～10日にわたったとしていたが、北海道地方史の先駆をなすとされる『札幌沿革史』は2月16日に札幌で降灰と震動があったと記した。これが史実とされて、噴火が16日まで続いたとされてきた(勝井, 2007)。

7年2月16日午後2時頃より樽前山破裂し、7時頃より灰を降らし終夜震動し暁に至りて止む。

しかし、北海道最初の歴史書『北海道志』では、船越報告に準じて次のように記していた。

7年2月8日胆振国勇払郡樽前山噴火し電光激写灰砂降ること雨の如し。震動数回。三日にして止む。

また、歴史学者・河野常吉(1863-1930)は古老の談話をそのまま(おそらく同意して)『さつぽろの昔話明治編上』に掲載している。

樽前山大噴火の際札幌には降灰せず、また震動せず。札幌沿革史記す所非なり」(富田貞賢談)

このように、噴火の一次資料である船越による開拓使報告を多くの人は支持していたとみられる。

筆者は、『札幌沿革史』の記す16日の噴火経過が船越が報告した8日と似ていることから、誤記ではないかと考えている。「16日の噴火では、札幌にも降灰があった」とする記述は、再考を要するのではないだろうか。

3. 三重の構造：大型火口・中央火口、溶岩ドーム

樽前山の17世紀以降の噴火史は、次のようである(勝井, 2007)。

1667年と1739年のプリニー式噴火^{*1}によって山頂の大型火口が形成され、現在も山頂の火口として残っている。その火口内に19世紀初頭に形成された中央火口

丘は1874年の噴火で火口が開き、1909年に溶岩ドームが充填して盛り上がった。

石川ほか(1972)は、このような噴火史によって形成された樽前山の三重構造を紹介した(用語は勝井, 2007)。

- ・直径1.2×2.0kmの円形の大型火口、
- ・この中に低い中央火口丘があり、
- ・その火口内に溶岩ドームがあって火口を充填した。

噴火史解明の基礎となった山頂の火口図は、1909年噴火の調査によって、初めて作成された。大井上(1909)は溶岩ドーム形成直前(4月4日)の大型火口の火口原に開いた新しい火口の図を掲載した。これが、バードが23年前に覗いた「輪郭がはっきりとした噴火口状の非常に深いカルデラ」であった(後述)。

4. 函館から白老へ

バードは1878(明治11)年8月12日に函館を出発し陸路で森へ行き、舟で室蘭へ渡り、陸路を通って白老に到着した(20日)。当時の新室蘭港(トッカリモイ^{*2}：あざらし海豹(湾)の木造仮棧橋にさっそうと降り立ったのだろう^{*3}。

そして、日本初の馬車用道路・札幌本道を辿って苦小牧まで行き、さらに東の未踏の道を辿って平取で数日を過ごし、「とても気に入った」白老へ戻ってきた。

5. 白老海岸で考えた地殻変動

バードは白老を気に入った理由を次のように述べた。

もっと丈夫だったら、きつとここを北海道の内陸の一部を探検する基地にしたと思う。内陸には探検者に報いるものがたくさんある。この辺りの蝦夷の地形変化は明らかにかなり新しく、それを生み出したエネ

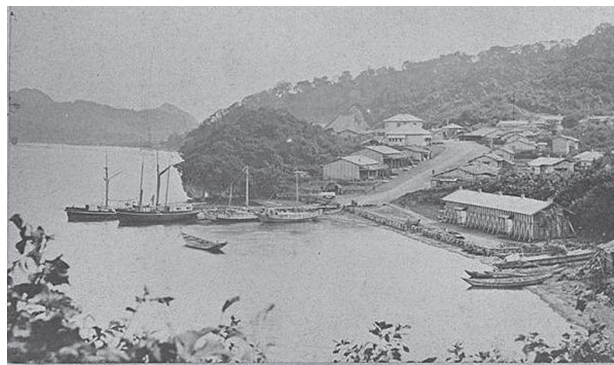


図2. 西から見た明治初年の新室蘭港(北海道大学附属図書館蔵)木造の棧橋に帆船が停泊している。広い道路は馬車専用、郡役所などが立ち並ぶ室蘭の玄関口となった(関口, 2021)。

ルギーは今なお終息していない。

バードがかなり新しいと考えた地形変化は、海岸が全体として海に向かって二、三マイル（約3～5km）前進していること、入江や岬に古い汀線が認められることで、それが景観上の一大特徴だと記した。

このコメントから白老の一带が今なお上昇していると読み取っていたことが明らかで、それは海面変動あるいはテクトニクスに関連する変動の理解に通じている。

筆者は、バードが王立地理学協会特別会員に選出された理由の一つに、このような理解力の高さに見ることができると考えている。

6. イザベラ・バードの樽前山行

幕末期の安政年間に画家・谷文晁の娘婿の目加田帯刀は現在の写真にかわる写生図を、蝦夷地一円に渡って描いていた。その樽前山に大噴火の痕跡は描かれておらず、全山が緑に覆われている（図3）。

バードは、その20年ほど後の8月29日、これと変わらぬ白老付近の河岸で火山灰露頭を観察し、遠くの火山地形を双眼鏡を覗いていた（図3）。その観察は目加田のスケッチ後の変化を見逃がなかった。

内陸を見ると右手に見える樽前火山の灰色の頂きには何も生えず、両側の森も一部が爆発によって欠けていた。

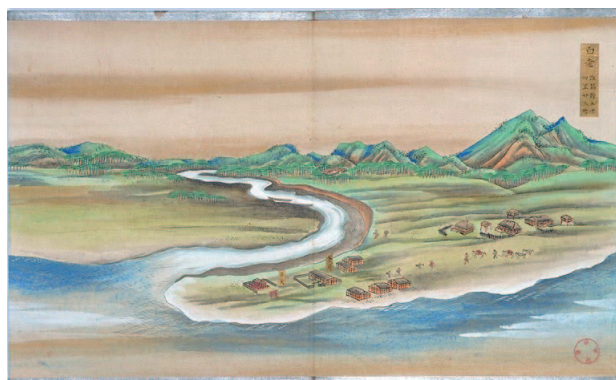


図3. 幕末期の白老川と樽前山（目加田帯刀、1871「胆振州（下）」：北海道大学附属図書館蔵）
原図は1874年噴火前の安政年間に描かれた。右端に描かれた樽前山は山頂まで緑に被われ、噴火による森林火災は認められない。白老川河岸の露頭に、新しい軽石層が露出している。

この山頂付近の失われた森が4年前の噴火によるものであることに、バードは気が付いていた。5年前のハワイ諸島探訪が地形を見る目を育んだことが良くわかる一節である。

こうして地形や地質を見て過ごすうち、樽前火山（volcano of Tarumai）や凝灰岩丘（tuff cone）などを見に行きたいと思うようになった。

① 新しい地層は軽石層をなし、表面は植物性の腐植土で薄くおおわれているので、噴火後50年も経っていない（図3 河岸の露頭）

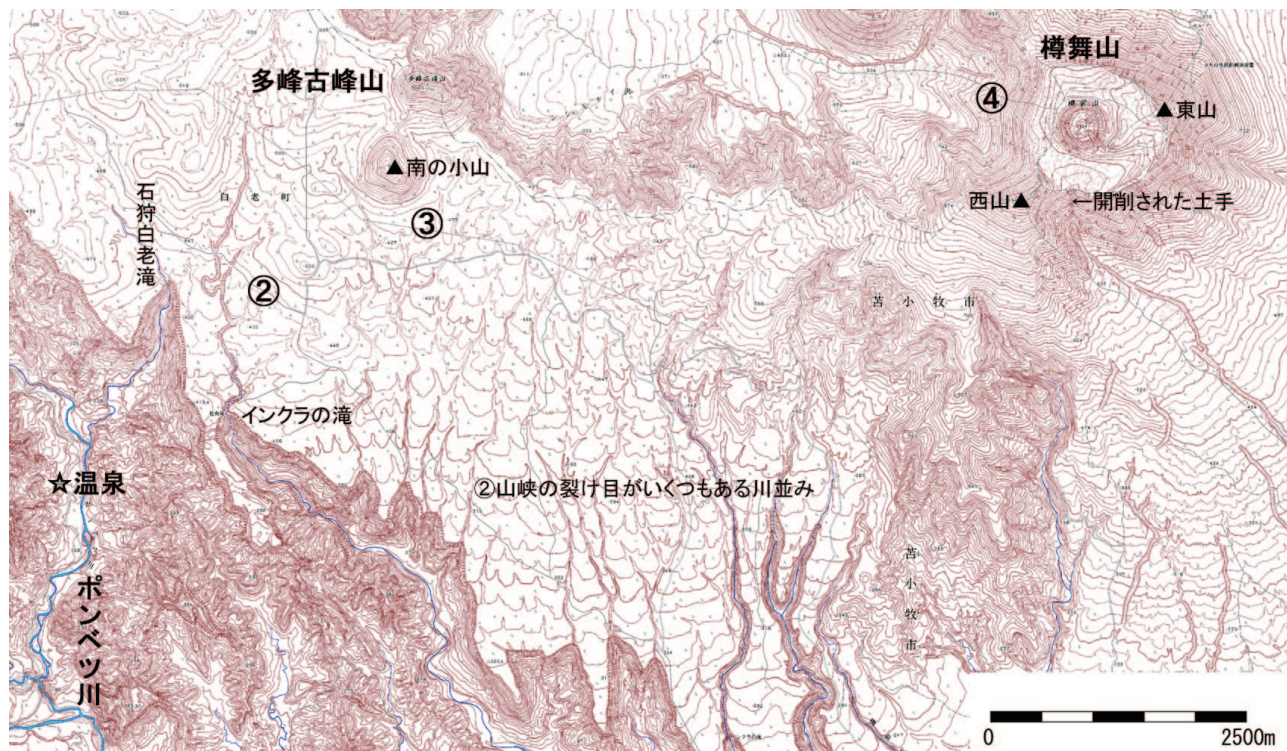


図4. 白老で想定した観察ポイント（国土地理院2.5万分の1地形図を使用）

★：ポンベツ川の温泉 ①：図3の白老川河岸。

- ② 深い森におおわれ、すばらしい山峡の裂け目がいくつもある川並み (図4 ②).
- ③ 侵食の進んだ尾根筋が古い時代の凝灰岩丘か? 確かめたい! (図4 ③).
- ④ 火山の背後から内陸を見たい (図4 ④).

そこで、良い馬を一頭と馬で案内するアイヌを雇い入れて、8月29日の丸一日、調査しながら火山をめぐることにした。

6-1. ポンベツ川の温泉

バードは「何時間もの退屈極まりなく疲れ果てる行程を経て」白老川沿いの温泉湧出地点に着いた。そこは辻井・窪田 (2012) によれば支流のポンベツ川^{*4}で、現在は滝野温泉の跡がある。

この温泉湧出を、バードは次のように記している。

- ・煙と蒸気の吹き出し。
- ・地下で爆鳴がとどろく巨大な割れ目。
- ・火山噴出物の鑑定 (軽石やスコリア、新しい溶岩など)
- ・割れ目の硫黄の針状結晶。
- ・温泉の成分 (硫黄分の堆積)、硫化水素ガス (強烈なニンニク臭)。
- ・湯温の推定 (手を入れられない熱さ、8分半で卵がゆで上がる、ハンカチを入れて乾き具合を見る)。
- ・温泉に湯垢はなく、湯につけたハンカチが汚れないことから、泉質が綺麗なことを確認。

以上は驚くべき観察手法で、筆者は旅に出た時、これだけの観察と記録はできない。さすがに王立地理学協会の特別会員に推薦されるだけのことはある!

その後、昭和の初めに沖野温泉として自然温泉を開発して立派な宿舎が建てられたが、湯温が低いこともあって成功しなかったそうだ。最近、訪れた人も「人肌の湯」



図5. ポンベツ川支流に湧き出る温泉 (ウェブ「ヤマレコ」marikka 投稿^{*5})

だったと、以下のように感想を述べている (「ポンベツ川支流～石狩白老滝・沖野温泉」^{*6})。

踏み跡を進むと、しだいに硫黄の匂いが漂い、「ポンベツ川温泉沢」の名板が付いた砂防 (ダム) の先に小さな湯滝を見付ける。上にこじんまりした湯船があり、濁ってしまったが人肌の湯が気持ち良い。

このようにバードの観察とはかけ離れた低い湯音となっている。50年の間に、地下の湯脈に変化が起ったのか。

この上流、ポンベツ川支流の源頭にある支笏溶結凝灰岩でできた「石狩白老滝」は容易には越せない。おそらく、当時のアイヌの人たちが支笏湖西岸への往来に使った道^{*7}があったのだろう。

6-2. 凝灰岩丘へ

バードも馬もへとへとになって、3時間をかけて尾根筋、白老台地 (古くは社台台地) へ辿りついた。ここは支笏溶結凝灰岩が造った高台で、登りきると、円錐形の小山が見えた (図6 中央の小山)。

その比高は60～100m、さらには120mもありそうで、老齢の木々と腐植土におおわれているが、円錐形の形状は実に明瞭だった。

この凝灰岩丘は多峰古峰山の南にある646mピークに当たると考えられ、標高500m弱の台地面から円錐状の小山で (図6)、古川・中川 (2010) によれば鮮新

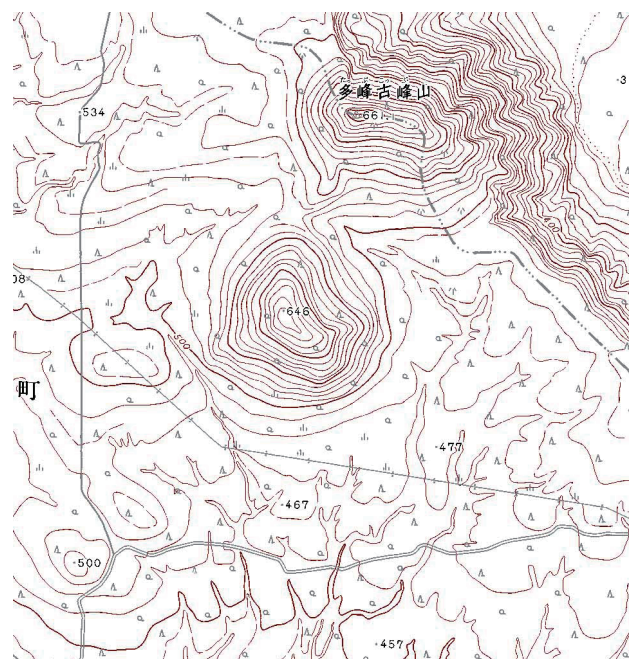


図6. バードが観察した多峰古峰山南の小山 (646m ピーク) 二瘤の山は、支笏火砕流堆積物に埋め尽くされずに地表に残された残丘^{*8}であろう。

世の溶岩からなるとされている。筆者は、溶岩ドームではないかと考えている。

6-3. 1874(明治7)年火口へ

バードはそこから必死の思いで1時間ほど東へ進み、「火山円錐丘」(火砕丘のこと)の頂きに上った。ここは樽前火山の南西縁にある西山(標高993.8m)だ(図4)。バードは、次のように観察した。

輪郭のはっきりとした噴火口状の非常に深いカルデラを発見できたので、十分に報われた。側面に植物が生い茂ったこの非常に深いカルデラは、カウアイ島の古い火山円錐丘^{*9}のものにとってもよく似ていた。

バードが観察した噴火口と見られる非常に深い空洞^{*10}(cavity)は現在では痕跡が残るのみであるが、当時の火山学者は図8のように描きとめていた。

勝井(2007)の樽前山噴火史によると、1669年と1739年のプリニー式噴火で外輪山内側に大きな火口原ができ、安政年間の噴火で中央火口丘と小さなドームが成長した。そのドームは1874(明治7)年噴火により吹き飛ばされ、直径約180mの火口が開いた。これがバードが見た「非常に深い空洞」で、その姿が噴火35年後に大井上(1909)によって描かれていた(図8)。それは、次の噴火の調査にあたった火山学者たちの仕事によるものだった。

1901(明治34)年1月に小噴火が起り、3月30日には激しい爆発があって周辺に降灰した(勝井, 2007)。直後の4月4日に大井上は樽前山頂をスケッチし、5月1日までの約一ヵ月間に渡って描いた8枚の火口図と写真を「震災予防調査会報告」に掲載したのだ。

その第1版の第1図と第2図に描かれた火口が1874年噴火で中央火口丘に形成されたものと推定される。この直後の4月18～19日に火口に溶岩が上昇し、饅頭状のドームが形成された(図9[上])。その周囲、とくに南に元の中央火口丘の火口縁が僅かに残っていた。かくして、「三重式の火山」と呼ばれる樽前火山ができた。

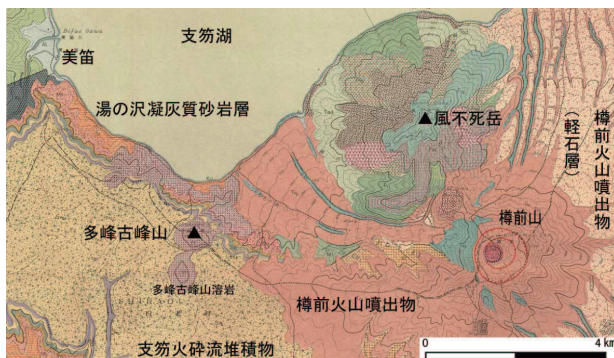
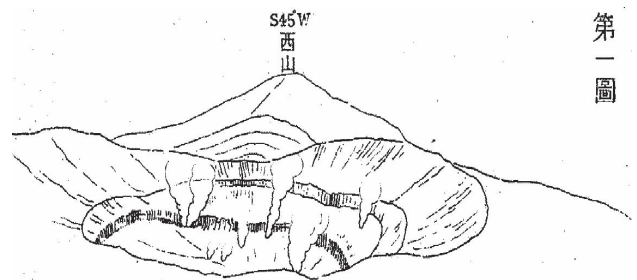
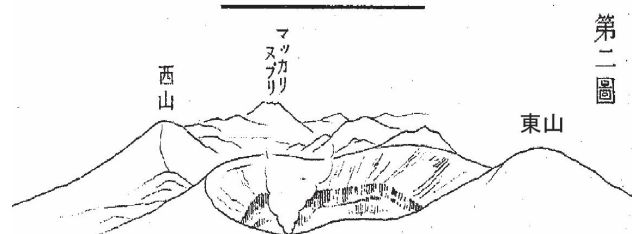


図7. 多峰古峰山～樽前山付近の地質図(土居, 1957)



東部火口壁より火口を望む 4月4日午前10時



南部火口壁より火口を望む 4月4日午前10時30分

図8. 1874年火口と考えられる1901年溶岩ドーム形成前の火口(大井上, 1909)

6-4. バードの見た唐沢源頭の露頭

バードは、火山円錐丘の一部と見た大きな火口原の縁を巻くように細い川が流れ、一部では開削(侵食)によって現れた赤と黒の火山灰からなる土手を見出した。

細い川と開削は、「1874年噴火時には火口原の南にあった水溜りは埋まったが、付近の空沢(唐沢のこと)上に長い裂隙が形成された」という木村岩太郎談(田中

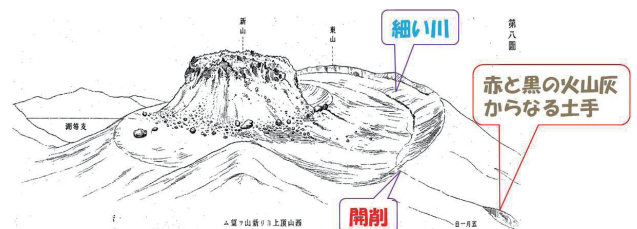


図9. 唐沢源頭の比較 [上] 1919年5月1日の樽前山山頂: 大井上(1919)の第8図 [下] 現在の唐沢源頭露頭: 中川(2011) 噴出物の境界を白線で示す. Ta-1874は1874年噴出物, Ta-aflは1874年火砕流堆積物. 左後方は西山, 背後に風不死岳。

館 1926) と符合する。それは大井上 (1909) の図にも示されていて、そこでは土手らしきものまで描かれている (図 9 [上])。

今では、大火山口から覚生川へ流れる唐沢の源頭部で、赤い 1739 年火砕流、その上位の黒い 1874 年・1909 年火山噴出物を見ることができる (中川, 2011)。バードの「赤と黒の火山灰の土手」は、ここを指すであろう。この記述も、バードが山頂に到達していたことを示す大事な証拠である。

6-5. 白老への賛辞

バードは 9 月 2 日の短いツアーを絶賛した。北海道の爽やかな夏がスコットランドを想わせたようだ。

朝の天気も、スコットランドの高地地方で雨が降る前に時たまあるようなすばらしい快晴だった。空は澄みわたり一片の雲もなく、視界は最高で、空も山も青く染まり、露がしっとり草を濡らし、太陽が光り輝いていた。そのため、そうでなくとも美しい風景は、いっそう魅惑に満ちていた。

7. イザベラ・バードへの贈り物

しかし、不思議なことに、樽前の山頂から北に見える支笏湖や恵庭岳の姿 (図 10) について、バードはまったく触れていない。それは彼女の課題だったのだが、すでに「死ぬかと思うほどへとへとに疲れ」ており、巨大なカルデラ湖や火山の連なりを認識することができなかったのかもしれない。

蔦や笹の茂る藪を馬に乗っての踏査で顔や手足は傷だらけ、拳句の果てに落馬して気を失ったりした。それでも案内のアイヌが献身的に助けて、なんとか白老に戻れたのだった。(括弧内は筆者)

凝灰岩丘とギザギザの峰々 (樽前山のこと) を後ろ髪をひかれる思いで後にし、疲れた馬に乗って四苦八苦して進んだ。だが、そのうち私の馬が完全にのびてしまったので、馬をひいて歩かねばならなかったし、最後の時間は川の浅瀬も歩かねばならなかった。白老に戻った時には夕方だった。

バードが見逃した絶景は、その百年後に北大理学部地鉱教室の八木健三 (1914-2008) によって描かれ、火山学者・勝井義雄 (1926-2015) に贈られた (図 10)。勝井先生に許されて、筆者は「支笏湖残照」をコピーさせていただいた。

今、この一文を書きあげてみると、バードにこそ相応しい一幅だと思うに至っている。記して、イザベラ・ルー

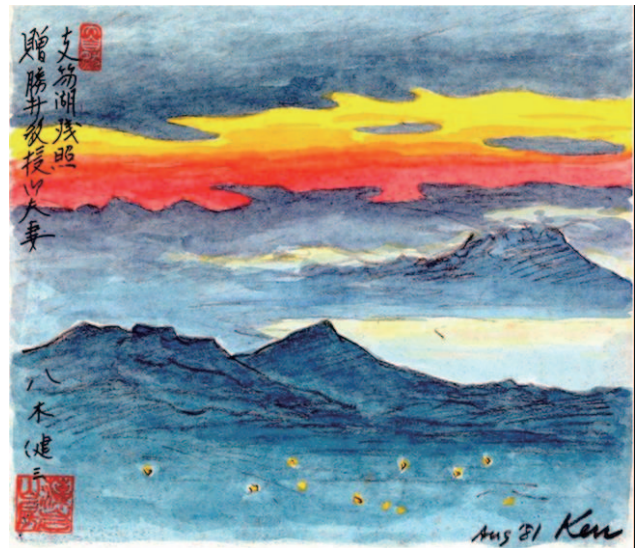


図 10. 八木健三が勝井義雄夫妻に贈った「支笏湖残照」(1981) 左から樽前山・風不死岳・支笏湖・恵庭岳

シー・バードの霊前に捧げるものである。

おわりに

バードは、自然に対する並はずれた好奇心と観察眼をもって白老を歩き、その最も優美な風景である樽前山とけし粒のような小山を遠望し、さらに新しく開いた火山口に挑戦した。

1871 年樽前山噴火の 4 年後、まだ緑濃い夏、アイヌと二頭の馬がバードのきわめて困難な山行を助けた。噴火後 7 年にして樽前山を世界へ披露できたのは、かれらの献身のおかげであった。そして何より、バードの類い稀な自然探訪への情熱が噴火後最初の火山口観察者となりえたのだと、筆者は思う。

加藤幸子 (1996) は、著書『翼をもった女』で、バードを「海を渡る鷹のように力強く飛び続けた」と評した。さらに、バードに原始の自然とそこに共存する無垢な人間を求める渴望があったと考え、日本という国の果てく北海道へ来て自由に奥地へを賛美することができたと述べた。

その「奥地」には平取のコタンがあり、帰路の白老には「自然の極」である美しい樽前山があったのだ。

日本におけるバードの未踏の地 (Unbeaten Tracks) は、アイヌ人がのびのびと暮らす豊かな自然に囲まれたく北海道、すなわちく蝦夷であった。彼女は、その魅力が日本での最も素晴らしい思い出になったと述懐している。

申し訳ないことに、ものぐさな筆者は彼女の探訪ルートを辿っていない。今回の記述の大部分は既往文献の整

理によるものであるが、『完訳 日本奥地紀行』と異なる点もある。バードが辿ったルート of 現地踏査をしたいところではあるが、筆者は翼を持ち合わせていない。他日を期したい。

コミック「ふしぎの国のバード」(佐々木大河)は秋田に入ったところだ(第8巻)。北海道はまだ先である。

引用文献

- 千歳市史編さん委員会(2019)『新千歳市史』通史編下巻, 第15章アイヌ民族.
- 土居繁雄(1957)『5万分の1地質図幅「樽前山」及び同説明書』. 北海道開発庁.
- 船越長善(1874)「胆振国勇払郡樽前岳噴火之図」(北大附属図書館蔵).
- 古川竜太・中川光弘(2010)樽前火山地質図. 産業技術総合研究所 地質調査総合センター.
- イザベラ・バード著(1880) 金坂清則訳注(2012)「完訳 日本奥地紀行3 北海道・アイヌの世界」東洋文庫, 平凡社.
- 石川俊夫・横山 泉・勝井義雄(1972)『樽前山 火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策』. 北海道防災会議.
- 開拓使編(1884)『北海道志』(歴史図書社1973復刻)
- 加藤幸子(1996)『翼をもった女』講談社.
- 勝井義雄(2007)17世紀の大噴火.『北海道の活火山』北海道新聞社.
- 中川光弘(2011)恵庭岳と樽前山.『札幌の自然を歩く(第3版)』. 北海道大学出版会.
- 永田方正(1891)『北海道蝦夷語地名解』(北海道庁, 明治24年)(復刻: 国書研究会1972年).
- 宮坂省吾(2020)樽前山1874年噴火を見た人たち. 総合地質, 4-1, 35-42.
- 大井上義近(1909)樽前岳噴火実況調査報告. 震災予防調査会報告.
- B.S. ライマン(1878)『北海道地質総覧』開拓使.
- 札幌史学会(1897)『札幌沿革史 全』.
- 関口新一郎(2021)『北海道みなとまちの歴史』亜細亜社.
- 田中館秀三(1926)樽前ドームの形態と新噴火. 地質学雑誌, 286, 353-366.
- 辻井達一・窪田留利子(2012)「イザベラ・バードの道」を現代に活かす. 第3回 地形と地質そしてケプロンの評. 開発こうほう, 38-43. 北海道開発協会 広報誌.
- 富田貞賢談「南5条辺りはすべて茅野ばかりなり」. 河野常吉編『さっぽろの昔話 明治編上』.

- *¹ プリニー式噴火とは、爆発的な噴火で大量の軽石や火山灰などの火砕物をまじえた噴煙が高速で上空高くまで到達する噴火をいう。(『地形の辞典』による)
- *² トッカリモイは知里真志保博士(1909-1961)の書き方、その意を松浦武四郎などに倣って山田(1984)は「海豹」とした。現在の地名は、永田(1891)のトキカラモイ(チカを取る湾)とする説に因っている。
- *³ 4月25日第4回会員交流会の質疑でバードが室蘭港に降りたことを指摘された。改めて調べたところ、その古写真を見つけることができた。ここには西洋風2階建ての郡役所のほか、官立病院、電信所、官舎、官庫などが立ち並び、室蘭の玄関口となったという(関口、2021)。坂の上、右手にあるホテル風の建物が郡役所だろう。
- *⁴ 「完訳 日本奥地紀行」(2012)の訳注では、樽前山へ上った川は白老川ではないとした。白老川を上ると、樽前山西10kmの尾根筋に至ってしまい、樽前山とはまったく結びつかないという。しかし、本稿で記したようにバードの目的は樽前火山だけではなく凝灰岩丘にもあった。それが多峰古峰山に比定されるのであれば、アイヌの案内人が白老川ルートを選択したと考えるべきであろう。さらに、白老川支流ポンベツ川以外には温泉湧出は知られていない。
- *⁵ <https://www.yamareco.com> (投稿 marikka)
- *⁶ 「ポンベツ川支流～石狩白老滝・沖野温泉」ezoyama.web.fc2.com/tozan/ishikarishiraoitaki2016.htm
- *⁷ 白老のアイヌが支笏湖西岸美笛のシラッチセ(岩屋)を使っていた可能性を示している。幕末期には仙台藩士がシラッチセに潜伏後、小樽まで歩き船で帰国したとされる。昭和25年頃までは狩猟の際の大切な野営地として利用されていたという。(以上は「新千歳市史」下巻1083頁)。バードの案内を引き受けたアイヌは美笛への道を知っていたのだろう。(この項、苔の洞門研究会の先田次雄氏の御教示による。)
- *⁸ 残丘とは、周辺よりも侵食が遅れたために突出した高まりを指す。(日本地形学連合編『地形の辞典』朝倉書店による)
- *⁹ ハワイ諸島北西のカウアイ島東南部にあるキロハンナ・クレターと推察される。バードは同島を旅した折にこの小楯状火山を目にすることができた。(「完訳 日本奥地紀行」の訳注で、火山学者・守屋以智雄の教示と付されている)。
- *¹⁰ バードは噴火口の側面に植物が生い茂ったと記しているが、大噴火の4年後に植生が復活するとは考えられない。注意すべき点だと、筆者は考える。

＜追悼：山岸宏光さん＞

北海道総合地質学研究センター第5回会員交流会（2021年4月25日）で、筆者は「樽前山1874年噴火を見た人たち―船越長善の詳細画像を中心に―」を報告。その中で、船越が噴煙と雷光を描いたことを紹介した。「直線状に描かれた光」は宮坂（2020）の図7と図10の二図であるが、山岸さんは「あれは火山弾である」と教えて下さった。1874（明治7）年火砕流が安山岩溶岩の火山弾を含んでいる露頭や巨大岩塊が火砕流跡地に散らばっていることを思い出し、ありがたく記憶に留めることにした。

ところが、まもなく山岸さんは息を引き取られたという。コロナ禍で交流会後の懇談を避けたことが悔やまれる。別れには後悔が付いてくる。

1年先輩の山岸さんとは学部移行した1964年に初めてお会いし、それから60年近くお付き合いさせて頂いた。

共同の大仕事は北大出版会の「北海道の地すべり地形」（1993）であった。山岸さんが勤務を離れた時間をつぎ込んで全道の空中写真を判読した資料をまとめたものだ。共著にしようかと申されたが、固く辞退した。ほ

とんどが、彼の研究成果だったからだ。

いろいろあったが、地鉦教室のある会で歌った「ベサメムーチョ」の見事さに、さすがの八木健三先生も「私はもう歌わない」と仰ったことが最初の衝撃だ。また、ご自分の結婚式で歌った北島三郎の「函館の女」は、さらに忘れられない衝撃だった。愚妻は、今でも山岸さんを「函館のひと」と呼んでいる。

私事を重ねるが、1986年に学位論文を作成していた時、先輩の山岸さんはまだのようであった。そのことを指導教官の勝井先生に質すと「我々は世界に通用する論文を書いている」と仰って、未発表であることを気にしてはいなかった。研究レベルの大きな差を改めて感じた思い出である。

筆者が遊んでいた支笏湖・苔の洞門を造った1874年火砕流の見学に勝井先生をお誘いした時、すでに長時間の外出は御無理となっていた。今進めている『札幌の失われた川』出版の準備が終わったら山岸さんで行こうと、密かに目論んでいたが、こちらも叶わなかった。

本誌の「樽前山シリーズ」をお二人に捧げますので、ご笑覧下さい。お二人に弔意を表すとともに、ご冥福をお祈りいたします。